

巻頭言

「日記をつける」

理事長 新谷 友良

以前は大学ノートに日記をつけていましたが、2005年の10月からワードで日記をつけています。何度か長い中断がありますが、現在A4で500ページ位になりました。何時に起きて、何を食べて、どこに行って、何時に寝たとか、暑かった、寒かったといった毎回3-4行の短い文章です。まとめて読み返してみたことは一度もありません。記憶を確認するために、必要な月日のところを見ても、なぜだかその日の記述がありません。文章の練習にもなっていない「自分との対話」です。

作家の日記を読むのが好きです。とくに、永井荷風の「断腸亭日乗」、武田百合子の「富士日記」、池波正太郎の「池波正太郎の銀座日記」がベストスリー。「断腸亭日乗」については何か書きだすと切りがありません。例えば大正七年正月元旦荷風40歳の日記は、「例によって為す事もなし。午の頃家の内暖くなるを待ち、そこら取片づけ塵を掃ふ。」と、元旦にはふさわしくないそっけない文章。荷風の反骨ぶりがうかがえます。武田百合子の「富士日記」は何度も読み返します。昭和52年の中央公論社の初版本が手元にありますので、ずいぶん昔から興味を持っていたことに少し驚きます。夫武田泰淳の文章が加わったり、娘さんの武田花さんの日記も挿入されていたりして、それなりに編集されていますが、その魅力は、埴谷雄高の推薦のことば「本来文学のなかだけにいるべき人物がこの世の現実のなかに出現するのは私達の驚きである」に尽きているような気がします。

池波正太郎の「池波正太郎の銀座日記」は数年前までベッドに持ち込む愛読書でした。文庫本で600ページ近い大部の作品ですが、横になって読んでいてもそれほど重くはなく、銀座の有名料理店の文章を読みながら、至福の睡魔に襲われていきます。

作家や有名人の日記の多くは公表を前提に書かれていて、他人の目を意識した「自分との対話」が読者をひきつけます。今はブログやSNSを使って日記を書く人も多く、作家や有名人でなくても「自分との対話」を他人に読まれることにそれほど抵抗を持たない人も増えているようですが、他人を意識すると「自分との対話」がぎこちなくなる旧弊は変えようがなく、当世風ではない日記を飽きずにつけている毎日です。